SHINCLUB 55

(株)辰　東京都渋谷区渋谷1-24-4 シブヤ百瀬ビル7F　tel/03-3486-1570　fax/03-3486-1450　URL:http://www.esna.co.jp

今月の写真 /monthly photo

高山邸　外観

今月のトーク/monthly talk

男たちが建てた家

甘酢のにおいがほのかに香る、練馬の閑静な住宅街。今回ご紹介するのは、この甘い香りの主、生姜の甘酢漬け「ガリ」の製造元・高山商店の高山さん親子の家作りの話です。コンクリート打ち放しのダイナミックな本社工場。その向かい側に建っているのが、写真のご自宅です。既存の木造家屋の隣にRC造のシンプルな2階建ての建物を増築しました。

高山商店の創業は昭和10年。昭和29年には株式会社となり、先代から引き継いだ社長は、夫唱婦随で商売に励まれてきました。今、コンビニで売られている寿司のガリの40%はこちらの商品ということです。ところが数年前、奥様が体調を崩され仕事からリタイヤすることになってしまいました。社長は、仕事が大好きで元気いっぱいだった奥様のこれまでの苦労に報いたいと思うようになりました。いつも奥様のことを気にかけ、時に仕事場に姿を見せる奥様に、優しく席を作ります。大学生だった息子さんも、見てみぬふりはできない、と積極的に仕事を継ぐ気持ちが固まったとのこと。「自宅の前の通りの反対側に会社があれば、継いで当然という気持ちでしたよ。しかし、若いうちは1度社会へ出ていろんな経験を積んでから会社に戻ってこようと思っていたのです。が、就職活動のとき、面接した企業の担当者が『あんた長男だろう。親父の仕事をきっぱり継げよ』と言うんです。『せっかくいい環境にいるのだから、やってやろうじゃないか』と思い直し、在学中から一緒に仕事をするようになって、早5年が経ちました。」と息子さん。

「今、親の仕事を継ぎたくない子供が増えていると聞いていますが、息子には、中小企業でも面白い仕事は出来るんだと話しています。生姜だけに固執しなくてもいい、会社を利用して面白いことをどんどんやってほしい。」と社長。「それに自分だってまだまだ若い。せがれと二人三脚で、人生楽しく過ごしていきたいですね。」と意気盛んです。

原材料の生姜は、中国からの輸入がほとんどだそうですが、このところ価格の上昇が著しく、社長も飛行機で現地へ往復することが多いようです。「日本は、いい時代を過ごした後、豊かさに胡坐をかいて、置いてきぼりを食っている」と危機感を募らせています。息子さんも、「日本は世界の中でも食料の自給率が低いし、食べ物の商売をしていると、その違いをひしひしと感じますね。」と、仕事を通じての共通認識が深まっているようです。

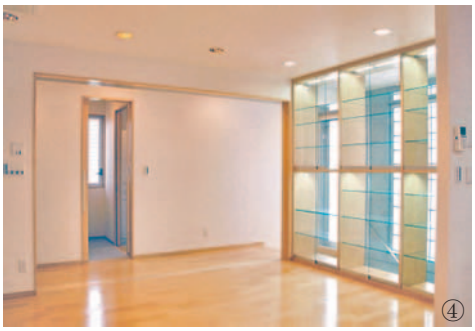
そしてこの秋、5年越しの交際を経て息子さんが結婚することになり、若い世代のためにご自宅を増築することにしました。しかし実はこれが父子二人で設計コンセプトを決めたという、まるっきり「男が建てた家」なのです。お嫁さんやお母さんの意見はほとんど取り入れられていません。

中央建物1階の扉の向こう側―そこは愛車が収まるリビング。ガレージというより床はデッキで、少し高くなった奥のダイニングとはひと続きの空間、いわば「車」というもう一人の家族のためのスペースです。「おかずがなくても車があればご飯が食べられる」と言うくらい車好きの社長の大胆なプランです。

息子さんも負けてはいません。向かって右にはもう一つガレージがあり、中央入口を上がると、2階のリビングには、趣味のミニチュアカーを並べる戸棚が設けられています。ダイニングには真っ赤なシステムキッチン。「車好きは、まず、色や形から入りますからね。女性には申し訳ないのだけど、我々が住んで楽しい趣味の部屋になっています。(笑)。」

「台所がないわけじゃないが、いい場所は男が占有しちゃった。後は住んでからのお楽しみだな。基本的な住居機能は木造の以前のスペース。そちらでは昔ながらの生活を楽しみたいですね。」
　住宅を建てるときには、その家の主婦の意見をまず尊重すべき、と思いがちですが、こんな思い切ったプランを目の当たりにするのも楽しいことです。

「そのうち木造もRC造に建てかえるのですか」と尋ねたところ、「きれいに使って、違和感を楽しみたい」とお二人。年数が経ってギャップが出てくるのが楽しみだということです。
「新しいモノと古いモノの融合―それを追求したんだよな。」と息子と顔を見合わせる社長に、脱帽です。

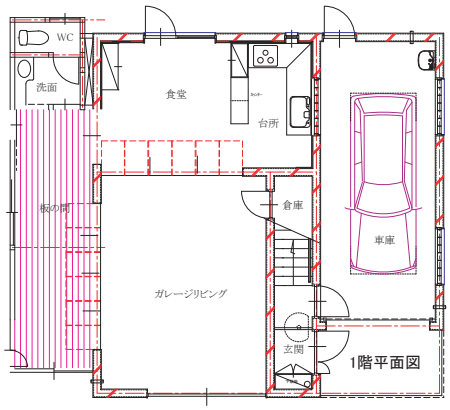


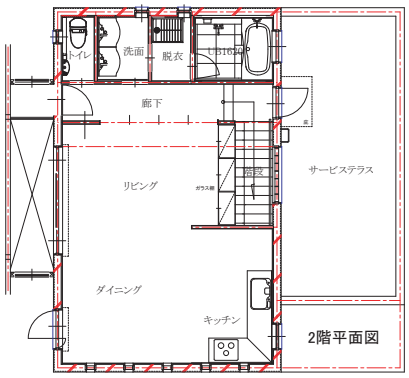
①全景:ガレージ扉を閉じた場合。②ガレージリビング。デッキは外部用。左側の木造とのRC造部分のつなぎ目は、吹き抜けになっている。ガラス引き戸で採光も十分。床下部分は収納を設けてある。③台所から愛車の収まったガレージリビングを見る。左側打ち放しの壁にはPコンフックが設けられており、実用的なインテリアに対応する。さらに手前左側は階段下の収納倉庫。④2階リビング。ガラス戸棚は息子さんのコレクション、ミニチュア・カーのディスプレイコーナー。廊下の向こう側がバス・洗面所・トイレとなっていて、リビングとはガラスの引戸で仕切ることができる。⑤2階キッチン・ダイニング。正面の通り側の窓を極力少なく、というのは息子さんの希望。木造側からの光と東側サービステラスからの光で室内は明るい。⑥母屋の庭から、建物を見る。

作品紹介/monthly architecture　06

「新しいものと古いもの」

「古い木造住宅の一部を最新のRC住宅に作り直したい」そんなお話から高山邸の設計は始まりました。2世帯住宅と言えば、通常は遮音に考慮してタテに分割するものです。ところが、「木造2階建ての横にRC造の2階建てを建てて父世帯が1階、息子世帯が2階に住む」というコンセプトにはじめはびっくりしましたが、「どちらの世帯も新旧両方を楽しみたいからね」という言葉を聞いて、なるほどと思いました。デザインも、あくまで古い母屋が主となるように配慮し、お世話になった古いものへの敬意は忘れません。一方、「車」という父子共通の趣味はまるで競っているかのように大胆にプランに反映しました。木造とRCの接続部分は吹き抜けとし新旧の対比を楽しむとともに、2階の架け橋は上下階の適度なつながりを演出しています。施工段階でも、母屋を手がけた大工さんと弊社の共同作業となり、ここでも新旧の共同作業となりました。
振り返れば、生業を大切にし世代を超えた継続と発展を目指す高山さん父子が、互いを尊重し時には葛藤し競い合う日常そのものが見事に映し出されていたのだと思います。「家作りとは、その人となりを映し出すものだ」ということを改めて実感しました。（松村拓也）





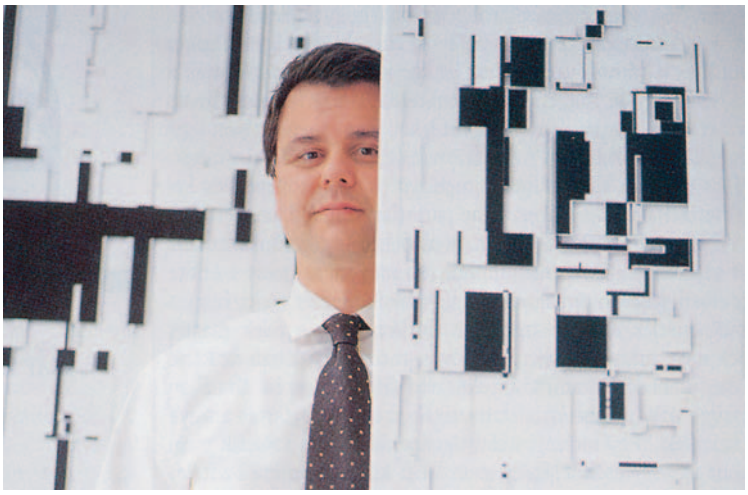
　木造にRC造を増築するという不思議な体験をさせていただきました。木造部分の接続に苦労しましたが、木造部分の改修工事を担当した大工さんにいろいろとご指導いただき、無事完了することができました。
　お施主さんが住みながらの工事でしたので、休日の作業は大分ご迷惑をかけたのではないかと反省しております。（中尾公二係員）

DATA

所在地：東京都練馬区
用途：専用住宅
構造：ＲＣ造
規模：地上2階
改修設計：辰一級建築士事務所

建築はサービス業

パルフィ・ジョージ／㈱パルフィ総合建築計画



パルフィ・ジョージ　profile

1952年	ハンガリーエゲル市生まれ
1976年	ブダペスト工科大学建築学科　修士課程修了
	ハンガリー政府建設省　建築研究所住宅研究研究員
1983年	東京大学工学系建築学科研究科博士課程修了
1983年	一級建築士事務所アーチ・スタジオを設立
1985年～	専門学校桑沢デザイン研究所非常勤講師（至現在）
1985年	㈱アーチ・ストラクチャー設立
1989年	㈱パルフィ総合建築計画と改名

主要な作品

山梨学院大学キャンパスセンター
山梨学院大学付属小学校
三井病院
Jean-Paul Hevin 新宿伊勢丹店
ANDERSEN　上野店

今回は、日本で活躍中のハンガリー人建築家、パルフィさんにご登場いただきます。 辰は2002年竣工した「MASUNAGA1905」（設計：サイトウマコト、実施設計：パルフィ総合建築計画）を施工させていただきました。

—来日して26年。これまで日本で仕事をしてこられて、どんな感想を持っていますか。

パルフィ：建築が他の産業と大きく違う特徴は、「人的要素」が非常に大きいことです。産業という言葉で考えれば、第二次産業のはずですが、実態は異なります。設計者、施工者に99％存在することは「作る」という作業。しかし人間がすることなので、設計・監理者が、現場の作業を行う人のモチベーションをいかに高めるか、どうやって施主のために「絶対にいいものを作ってあげよう」という気持ちにさせるか—これが結構重要なんですね。

自分の仕事だけでなく、仕事の対象となるものに対して建築ほどグレードが変わるものはない。例えば、ホンダの車を作るということは、「工場の作業員が一生懸命働けばいいものができて、そうでないときはダメだ」ということはなく、車の性能は極端には変わらない。しかし、建築は恐ろしくそれが大きい。ある意味、システム化されていない、一番遅れている業界ではないかと思います。

—現場の予算管理もありますし、担当者のコミュニケーションがなかなかスムーズに行かない場合もありますが、いろいろと初めての条件に対応しなくてはならない建築もあります。

パルフィ：建築の中で「今までだれも考えていなかったアイディアを盛り込む」ということもあるとは思うんですが、僕は、誰も考えていなかったことの中にどれだけ評価に値するものがあるのか、疑問を持っています。もちろん建築の中にも新境地というのはあるし、人間の空間に対する欲求はいろいろと変化していく。しかし、逆に今最先端の技術をどう人間らしいものに生かしていくか、を考えたほうがいいのに、デザインとか形とか「今まで誰も考えていなかったことが何よりも先に来て、作者の存在だけがアグレッシブに出ている気がします。メディアの問題もあると思います。とにかくメディアに載らないと仕事が来ない、という風潮があるようですが、僕自身はこれまで長いこと仕事をしてきて、評価されたい対象が本当に変わってきました。本当に評価されたいのは、お客様からです。本格的な会社案内も、ホームページも作っていません。それでもお客様から口コミで仕事をいただいています。

—建築専門雑誌だけでなく一般誌でも建築を取り扱うようにはなりました。

パルフィ：それは住環境に対して一般人の関心がある程度高まったこともあるかもしれませんが、僕は日本人の暮らしがそれほど良くなったとは思わない。部屋が広くなったわけでもないし、結局「美しい建物に住みなさい」という消費・購買意欲を刺激しているのに過ぎない、と思います。僕は、人がいない建築写真は無意味だと思う。誰もいない殺風景な空間、誰もいないところで建築は美しいはずはない。そんな建築写真がいっぱい雑誌に出て、その隣に、ファッションや食べ物のページがあって、「そんな服どこにしまうの？」と言いたくなってしまいます。

—お客様の希望というのもありますね。

パルフィ：最近、大手ゼネコンの一人勝ちみたいな話も聞きますが、一人一人のお客様のニーズに応えて、きちんと工事するところがどれだけあるでしょうか。お金持ちなら、坪300万かけてもいい、というお客様もいます。

例えば、初めて家を建てるなら、風変わりな打ち放しの家を高級住宅街に建てるかもしれません。でも50歳も過ぎ、会社も経営するような地位になって「そういう家に住むのはくたびれちゃった、もっと楽な空間に住みたい」という希望を持つお客様もいます。木造もきちんと作れば、設計に2年以上かけて、宮大工を呼んできて、となるかもしれない。でもそこまではしたくないと思うでしょう。じゃ5億円で土地を買って、2億円で建物を作るとして、そのときに、天井はむき出しとか、アルミのフレームとか、都心に今並んでいるような建物はどうか、というとお客様はそういうものに関心がないんですよ。彼らが見ているのは、「Architectural　Digest」とか、外国の雑誌、そして不動産情報。そんな中でも1冊に1，2件、満足するものがあればいい。ギンギラギンのアメリカのリゾート物件はほしくないし、装飾は不要。まじめでシンプルなディテールの建物だけど、中身にはそれなりのグレードのものがほしいんです。ソファセットに600万かかってもかまわないし、厨房に2000万かかってもいい。そのように　お客様が考えているのに、そういう生活文化にまで理解をもっている施工業者がどのくらいいるでしょうか。そういう暮らしに対してまったく情報がないんですよ。

「文化がない」というのは、「育てられていない」ということなんです。僕は、今の日本人は子供と一緒に過ごす時間がものすごく少ないのではないか、と感じています。大事なことが伝えられていない。18-22歳の若者が挨拶もろくにできない。40歳過ぎの企業経営者なのに、人のことを気遣えない。おそらく、大学にいってから、親と全然接触がないのではないか。多分、家には寝に帰るだけ。1週間に1,2度は家族が一緒にテーブルを囲んでそれぞれの行動を話す機会を作らなくてはまずいのではないですか。いろんな環境、情報の中でお父さん、お母さんの行動を見せる—そういうことで子供は育つと思います。

—ハンガリーでは違いますか。

パルフィ：だんだんハンガリーもそうなり始めていますね。日本は塾があって、顕著ですけどね。

基本的に今の経済の流れは、「脅し」をかけて人をコントロールする、アメリカ流になってきていると思うのです。一生同じ会社に勤めていたらだめだぞとか、子供は作らない方がいい、とか。政治もそういうアメリカの経済の手法から学んでいる。個人に分断された社会が形成され始めている、と感じます。

「安心して暮らす」ということについて自分なりの考えがあって、人生の「優先順位」を自分で持っている人は、宣伝なんかに心を動かされない。18000円でどうしようもないスニーカーを買うくらいなら、3000円で十分だと子供に納得させて、ほかに必要なものをきちんと説明できる大人がどれだけいるでしょうか。

—耳が痛いお話ですね。5年前にハンガリーにも事務所を開設されて、これからも日本とヨーロッパを行き来するお仕事が増えそうですね。本日はどうもありがとうございました。

現場最前線/under construction　06

「美意識を持って仕事に挑む」

日南鉄構株式会社
代表取締役専務　鹿島　正氏

今回は、鉄骨加工業のご紹介です。

「親父（社長）が真っ黒になって仕事している姿は、かっこよかった。」
日南鉄構の鹿島専務は、この仕事を選んだきっかけをそう話してくれました。地元の葛西は、昔から鉄工所や、運送業、工務店の多い地域。地元意識が強い町だったそうです。
戦後、日本経済が右肩上がりの頃は、「町の鉄工所」として地域の人々にかわいがられて会社も育ちました。しかし、バブルがはじけ、また近隣も開発が進み、マンションが林立するようになると、趣が少し変わってきました。
「家を建てる世代が40代になり、ハウスメーカーの家を建てたがる人、個性的なこだわりの家を建てる人が増えてきた。そんなお客様は皆、勉強している。」と鹿島専務は言います。坪単価いくらで請け負う世界ではなくなってきました。地元の工務店を嫌うような風潮も生まれ、今までどおりの地域密着型ではいずれだめになる―専務は、より個性的で施工難易度の高い仕事に挑戦する道を選びました。同業者とたたきあいにならず、特命で仕事も取れる。もともと一級建築士の免許も持っているため、設計者への提案やコミュニケーション能力に優れているという評判です。

「いや、そんなことはないですよ（笑）。ただ、設計事務所との打ち合わせが多く、ディテールなんかもその場でスケッチしながら話をするので、重宝がられているかもしれませんね。最近思うのは、鉄骨業をもっとカッコよくしていきたい、ということなんです。『実はこういう職種があって、こういうものもかっこいいんだ。』とスタイル、ビジュアル的にもそういう＜業態＞になれないかな、と思っているんです。鍛冶屋というだけでは、今の若い奴は弱い、続かないですからね。」と鹿島専務。

―確かに作業そのものは大変です。

「だから、作業場とか仕事そのものもかっこよく見えるようにできないかな、と考えているんですよ。鉄板なども最近凝った加工をすることが多いでしょう。溶接一つにしてもそのプロセスを大事にして、いかにきれいに見せるか、美意識をもってやる。仕事の抱え方、終わり方、そういうこともかっこよくできると話しているんです。理論として、自分の中にそういうスタンスを持っていないといけないと思うんですよ。それが安全管理につながるし、かっこいいと仕事にやりがいがもてるじゃないですか。着古したTシャツ着ているようじゃ、だめ。『学生のアルバイトじゃないんだぞ、ぴしっとプロらしくしろよ』と言っています。」

―最近は、原材料の高騰でどの業種も大変なようですが。

「ほんとにそうですね。中国需要がすべてかわかりませんが、鉄板なんか船舶需要の増加で品薄です。仕入先は一見の客には分けてくれません。現金で買う、と言ってもダメな場合が多いんです。商社に保証金を入れて確保していますが、枠がいっぱいになればすぐなくなります。そうなると、いろいろ苦労ですよ。」

―どうもありがとうございました。

写真左：事務所の前で：設計事務所のようなちょっとおしゃれな建物。ここにも専務の心意気が見える。
写真右：工場で職人さんたちと。若手は現場に行っているとのこと。

原寸場：図面を原寸で床に起こし、鉄骨や鉄板をここで加工する。設計事務所は、最終的にここで「原寸検査」を行う。この日も、床に様々な図形が描かれていた。

TOPICS/INFORMATION

㈱辰　創立記念行事　10月2～3日　熱海　桃山旅荘

平成11年10月創立以来、満5年を経て、10月2日（土）、3日（日）は全社員参加による研修、および懇親会を、ZENグループ保養所・桃山旅荘において行いました。
研修会では、来期の売り上げ目標に向かって、社長を筆頭に一同熱い決意を誓い合い、その後、和やかな懇親会と相成りました。

三鷹N邸　地鎮祭　10月13日　武蔵野市

木と土壁を素材とした建築で知られる設計者が、鉄骨造と金物工事の住宅を作ります。

構造：鉄骨造
地上　2階　地下1階
用途：専用住宅
設計：薩田英男　／
　薩田建築スタジオ
完成予定：2005年5月

編集後記

・日本人の心が「イチロー」とともにあった熱い一日。皆様はどのような感想をお持ちになりましたか。今月は「親子」を考えさせられる話の特集となりました。
・新会社設立からあっという間の5年間でした。おそるおそる始めたShinClubの編集も皆様のご協力いただき、ここまで続けることができました。今後ともよろしくお願いします。

(株)辰　通信　Vol.55　発行日　2004年10月12日　編集発行人　松村典子